「白い惡魔」（ジョン・ウェブスター）

ローマのブラチアーノ公爵は、フィレンツェ大公の妹イザベッラといふ立派な妻と子がありながら、若くて頗る美貌の人妻ヴィットーリアに夢中になる。ヴィットーリアはローマの樞機卿の甥カミッロの妻であつたが、歳の離れた不能同然の夫を飽き足らず思ふ一方、公爵を憎からず思つてゐた。そこで、彼女の兄で、公爵の腹心の家來フラミーネオは二人の密會の手筈を整へる。「惡黨はお偉方のエテ公にならねば出世せぬ」と考へる彼は、云はば公爵の「女衒（ぜげん）」となつて己が立身出世を圖（はか）らうとしたのだ。

密會の時、ヴィットーリアは公爵に、昨晩見たといふ夢の話をする。イザベッラとカミッロの二人が教會の大木の下にゐた彼女を口汚く罵（ののし）り、生き埋めにしてやると叫んで鶴嘴（つるはし）で墓穴を掘り始めたので、彼女が恐怖に震へてゐると、突然旋風が卷起り、二人は折れた大木の大枝に打殺されて、墓穴に顚落したのだといふ。話を聞いてゐたフラミーネオが獨（ひと）り言（ご）つ、「惡魔そ

このけの女だ。夢にことよせて、公爵夫人と己れの亭主を殺せと、そそのかすとは」。しかし、さう云ふフラミーネオにしてからが、「ああ、マキャヴェリ黨の術策こそ素晴しい」と嘯きつつ、公爵に取入つて惡事の策謀を運らし、狙ふ二人の殺害計劃を推し進め、首尾よく亡き者にしたばかりか、後には彼の悖德を詰る弟マルチェッロをも殺して了ふ。そして、殺人と姦通の容疑をかけられて捕へられたヴィットーリアを公爵と共に救ひ出し、三人はパドゥアに逃れ、公爵とヴィットーリアは結婚してそこに邸宅を構へる事になる。

一方、妹を殺されたフィレンツェ大公は復讐を遂げるべく寢刃を合せ、これまた策謀を運らして、以前に殺人と放縱の科でローマを追放されてゐたロドヴィーコ伯爵を呼び寄せ、イザベッラを熱愛してゐた伯爵の復讐心に付込んで、自らの復讐に加擔させる。その後、彼らは變裝してパドゥアの公爵邸に近づき、奸計を用ゐてまづは公爵を毒殺し、次いでロドヴィーコがヴィットーリアとフラミーネオを刺し殺す。死の間際にヴィットーリアは云ふ、「わたくしの魂は暗黑の嵐の中の船のやう。行く先も解りませぬ」。フラミーネオも云ふ、「ああ、俺は五里霧中だ」、「燃えつきるらふそくのやうに、俺は一瞬ぱつと輝いて消えるのだ」。

シェイクスピアの「ハムレット」（一六〇二年）に、「この世の關節がはづれてしまつたのだ。

なんの因果か、それを直す役目を押しつけられるとは！」（福田恆存譯）といふ有名な臺詞があるが、その十年後に執筆されたこの慘澹たる復讐劇にも、舊來の價値秩序の壞亂の痕跡は紛れもない。作品の題名は「白い惡魔は黑い奴より忌はしい」といふ俚諺に基くといふが、美貌の下に「惡魔そこのけの」邪心を隱すヴィットーリアは無論「白い惡魔」の片割れだが、作中の大公も公爵も伯爵も高貴な身分らしからぬ「忌はしい」本性の奴隷でしかないし、何よりも、出世欲の爲には一切の道義心を省みぬ、人間の皮を被つた惡魔、フラミーネオがゐる。

但し、誰もが美德を尊ばぬ譯ではない。フラミーネオ、ヴィットーリア、マルチェッロの母親コルネーリアは、己が息子と娘の策謀を見抜き、その悖德を痛烈に指彈し、惡魔の子供等を產み落した自らを呪ふ。そして、殺されたマルチェッロを掻き抱き、名高い葬送歌を狂ひつつ歌ふ彼女の姿は哀切極りないが、とどの詰りそれは惡德の壓倒的な力に對する美德の無力を證すものでしかない。さういふ救ひ無き地上に於て、人間は誰しも「行く先も解」らず「五里霧中」の未來に向つて刹那の生を歩むしかないのか。（川崎淳之助譯、エリザベス朝演劇集、筑摩書房）